

兒童心理學文獻抄 三

牛島義友

子供の道徳

子供には惡意はない。併しよく虚言を云ふ。惡意のない虚言、之は虚言云ふ譯に行かないであらう。子供の爲した事の結果から判斷して大人の積りで子供を罰する事は意味のない事云ふよりも有害な事である。子供は何故虚言を吐いてはいけぬか云ふ理由として叱られるから云ふ。斯る考へ方から如何にしたら、子供に自律的な道徳意識を抱かせる事が出来る様になるであらうか、此の問題を解決する爲には彼等の道徳性を正しく知りその發達の條件を明らかにしなければならぬ。

ジャン・ピアジェ、子供の道徳觀、霜田靜志、竹田浩一

郎譯著（東苑書房、昭和十一年）。

波多野完治、子供の道徳（刀江書院昭和十一年）

ピアジェの兒童研究に就ては既に一部紹介したが、最近の研究たる「子供の道徳觀」が前記の書によつて翻譯或ひは紹介された事は喜ばしい。彼は子供の道徳意識の特徴を道徳的實在觀とし、それに就て詳細な説明をなしてゐる。第一章は遊戯の規則に就ての子供の考へ方を分析して子供の道徳觀を研究してゐるが、今は特に興味ある第二章に就て少しく紹介しやう。

こゝに於ては子供の道徳的判斷を考察してゐる。先づ道徳的考へ方が出来る前に既にそれに應じた道徳的行動がある。子供が現在持つてゐる考へ方は一、二年前の行動を反映してゐるので、現在の考へ方通りに現在行動してゐる譯ではない。此道徳觀と道徳的行動とのいづれを考慮に入れ

て見て行かねばならない。さて次の様な盗みに關した話を二つ聞かせる。

イ、アルフレッドは貧乏な一人の友達を持つてゐる。今朝も御飯を食べなかつた云ふのを聞いて氣の毒になりパン屋に入り店の者が右を向いてゐる間にパンを一つ窃つて友達に與へた。

ロ、アンリェットが或る店に入るに奇麗なりボンのあるのを見てさぞ自分の着物に似合ふだらうと思つてこつそり盗んで逃げた。

此の二人の中どちらの方が悪いか、こ聞いて見るに年少の者(六、七歳)には結果から判断する者が多い。例へばリボンよりもパンの方が高價だからパンを取つた者の方が悪い、従つてパンを取つた者は頬ぺたを四つ打つて叱らねばならぬがリボンの方は二つでよいと考へて居る。斯る結果から判断する考へ方はその他の場合にも色々見られる。例へば過失で十一の茶碗を割つた者、盗み食ひをしやうとして一つの茶碗を割つた者、を較べれば前者の方がより悪い。何故ならば澤山毀したから云つて、過失の原因道徳

は問題にしない。

或ひは虚言云ふ事に對して子供はどんな考へを持つてゐるであらうか。最も原始的な段階に於ては嘘は悪い言葉と思つてゐる。例へば「馬鹿」も「間抜け」も云ふ云つてはいけない言葉」を云ふ事が嘘だと思つてゐる。

次に六歳から十歳位迄の子供の普通の定義は嘘は本當でない事だ云ふ。併し此の言葉の中にはごまかし過失を混同してゐる。例へば、

嘘つて何だか知つてゐるかい?——本當じやない事を云ふ事——「二に二足す五」、之は嘘かい?——うん、嘘だ。——何故?——正しくないから。——二に二足すの五云つた子はわざと云つたのかい?知らないで云つたのかい?——知らないで云つた。——ぢや、知らないで云つた時も嘘になるかい、ならないかい?——嘘になる——それは悪い事かい?——あんまり悪くない。

或ひは更に具體的の嘘の例話をして聞かせる。例へば甲の子供は道で大きな犬に會つて非常に怖かつたので家に歸つて牛程もある大きな犬を見た話した。乙の子供は今日

先生からよいお點を貰つた。嘘を云つたらお母さんは喜んで御褒美をくれた。即ち前者は惡意のない誇張、後者は瞞さう云ふ意志の明らかなものである。此の二人の中どちらが悪い。小さい子供は牛程大きい犬なんてゐないから嘘で悪い。後者の方はお母さんが信じたのだから悪くない云ひ、こんでもない考へ方をしてゐる。お母さんが信じらるならばよく、お母さんが信じないならば悪いとする。それが大きい子になる。嘘の動機内容から判断して點をごまかした子の方が悪く、前者は「牛を犬と間違へたんだ、頭が悪いんだよ」を解釋辯護したりする様になる。

以上の様な行爲の結果から判断したり、叱られるから悪いとか、判断の根據を外部のものに歸する考へ方を道德的實在觀云ふ。斯る考へ方になる原因は二つある。一つは子供の本來の考へ方による。即ち子供はすべてのものを精神化する。共に物質化して見る。夢さか考へる事等も皆物質的な實在的なものに考へる。斯る爲に道德的行動を見る場合にも精神的な動機よりも具體的な結果を見、それによつて判断せんとする。

斯る生來の傾向がある上に第二の原因として親の教育態度が影響して来る。即ち子供に善い習慣をつけんとして様子の規則や命令を子供に課す。或ひは子供の行動に對して一々賞めたり叱つたりする。併し、子供には何故叱られねばならぬかが分らない事が多いので、悪い事をしたから叱られた云ふよりも、叱られる事が悪い事だと思つて来る。悪い言葉を使ふと叱られる。嘘を云つても叱られる。それで悪い言葉と嘘とは同じだ云ふ三段論法を行ふ。

以上の様な道德的實在觀は元より正しい道德觀ではない。子供がより高い道德意識を持つ様になるのは協同的な社會生活を營む様になつてからである。幼兒の間はまだ大人に對して一方的尊敬しかなさず、大人の云ふがまゝに他律的な行動をする。それが他の子供の協同生活によつて相互的尊敬を拂ふ様になつてから自律的意識が生じて来る。親さか教師さかがいつまでも一方的な尊敬を要求し、教育的な態度で臨んでゐる。子供は正しい道德的發展が得られず、激しい反抗になり、豫期せざる結果を招く事になる。次に子供の惡癖さか困つた性質に就て調べ此の方面から

彼等の道徳的生活を眺める事にしやう。

アッカーソン、子供の困つた行動 (L. Ackerson: Children's Behavior Problems I, 1931)

米國では教育相談事業が非常に發達して子供に困つた問題が起るに相談所の援助を求め、之はある相談所を來訪した五千名の子供に就てその困つた問題の種類を調べたものである。此の中には少數の不良兒も含まれては居るが、大部分のものは普通の子供である。彼等はどんな問題を持つてゐるであらうか。最も多い問題は偏食さか、落付きがない事、教室で他に迷惑をかけるさか、甚しいのは狂氣の疑ひさか、或ひは不義の妊娠等の性質行動に關した問題である。

次に多いのは知能に關した問題で、その他職業指導さか、身體缺陷者等の問題がある。故に行動や性質に關係した問題に就て更に研究して見やう。

困つた問題としては數百の問題が數へられるが、之等の中には年齢と共に増加して行くものも減少して行くものもある。前者は子供が將來惹起すであらう問題を意味し、

後者は幼兒の現在の問題を示す故に何等から參考になるかと思ひ問題を列擧する事にしやう。

年齢と共に増加する問題

性質に關したもの——つかへた讀み方、白晝夢、自己耽溺、陰氣な様子、神經過敏、劣弱感、年下の子供さのみ遊びたがる。心配症、早發性痴呆の疑ひ、無反應、過度の被暗示性、創始性や野心の缺如、無關心、人格の變轉、變質傾向。

行爲に關したもの——拘引、收監、異性に對し過度の興味を持つ、性的關係、不義の妊娠、喫煙、粗暴、家出、怠惰、轉職、就職拒否、性的不良、窃盜、賭博、手淫、自殺未遂、陰氣、近親相姦、怨恨、虛言症、徒黨を組む、惡友、夜遊び、責任感缺如、父兄の家に住むのを嫌ふ。非能率的。

年齢と共に減少する問題

性質に關したもの——落付きなし、氣が散り易い、甘つたれ、泣きみそ、内辨慶、心配症、神經質、夜恐症。

行動に關したもの——遺尿症、癩癖、破壊性、暴力、大便の失敗、教室で騒ぐ、異性さの相互手淫、指を吸ふ、偏

食、反抗、年少者に残忍、親分氣取り、不従順。

その他色々あるが、以上が主要なものである。

寺田精一、兒童の惡癖(中文館、昭和十一年、重版)

子供の問題を數へる事は易しく、子供の行動を診斷する事はさほご困難ではない。併し之を矯正し、治療する事は難事中の難事である。子供に對する絶大の愛が必要であるが、その方法はあくまで合理的でなければならぬ。子供の矯正法に就ての意見は數多く發表されてゐる。併し科學的根據を持つた治療法は遺憾乍ら甚だ乏しい云はねばならぬ。之らは教育治療學の發達に俟たなければならぬ。併し現在問題を持つてゐる子供に對してはさかなく間に合ふ治療法が必要である。此の意味で本書は最も推賞に價ひするもの云つてよからう。即ち、彷徨、怠惰、盗み、嘘言、賭け事、間食、潔癖、不潔癖、弄火、殘酷、口答へ、性的惡癖、遺尿等の惡癖に就てその原因並びに取扱ひ法に就て説明が加へられてゐる。

之等の子供の問題について内外の研究を紹介し信頼性のある處適法を述べる事は必要な事と思ふが、いづれ稿を改

めて詳述したいと思つてゐる。

以上二十三回に亘り兒童心理學に關した文獻を抄録して來た。問題別に紹介した爲に最近の研究で紹介に價ひするものも多々あるが、之等を紹介する機會が得られなかつた事は残念である。

又重要な問題に就て、例へば遊戲の問題に就て述べなかつたが、之は別の機會に補ひたいと思つてゐる。

又初めは邦文文獻を主とする豫定であつたが、問題の都合上、外國の文獻に頼らざるを得なくなつた。吾國に於ける兒童研究は古く明治二十八年のブライヤーの翻譯にさかのぼる事が出来るが、明治年間の兒童研究は殆どすべて外國の研究の翻譯に止り、大正年間に入つて専門の兒童心理研究者が現はれる様になつたが、獨自の研究が數多く發表されるに至つたのは漸く昭和に入つてからである。従つて取上げられた問題も少數であり、子供の教養保育に關聯して研究されたものは又その中の少數である。故に日本に於ける研究のみにては殆ど實際家の要求にはそぐはないと思ふ。今後日本に於ても先進の米獨に劣らず數多くの勞作が

なされ、幼児保育に直接役立つ結果が生れる事を希望して止まない。之につけても保姆ミか父兄等の實際家が研究者ミ協力して研究する事が必要である。實際家が色々の困つた問題を提供し、それに就ての知見を研究者に報告し、それに基いた研究者の組織的な研究に便宜を與へる、例へば質問條項に丁寧に答へるミか、兒童觀察の便宜を與へる事等が必要である。斯くして初めて子供の正しい認識ミ合理的な教育法が生み出されて來る。

最後に此の稿を終るに當り最近の概括的な邦文兒童心理學書に就て一言しておかう。

我國に於て單行本ミして發表された兒童青年期に關係した心理學書は百三十冊に達し、教育的心理學を含めれば三百七十冊に垂んミしてゐる。之等の中には既に古本屋にても入手しがたいものもあるが、兎に角かく多數の書物が出版されてゐる事は讀者には却つて迷惑の事かミ思ふ。故に最近出版された主要な概括的な單行本に限つて良書を推薦しやうと思ふ。此中には幼児期に關係のあるものを選び、異常兒のものは省いた。

先づ最初に讀むに適した書物、即ち餘りに専門的に互らず平易にして正確な知識を供給してくれる書物ミしては次のものが適當である。

青木誠四郎、**兒童心理學**、賢文館、昭和十一年、三圓五十錢

丸山良二、**幼兒の心理**、三友社書店、昭和六年、二圓

檜崎淺太郎、**日本教育的心理學**、藤井書店、昭和八年、五圓五十錢

もう少し簡単な書物を要求されるならば、

大脇義一・立花祐雄、**兒童心理**、叢文閣、昭和十一年

以上の書のいづれかを讀まれた後に子供に就て考へ直し、更に深く知る爲に次の小著は適當である。

波多野完治、**子供とはどんなものであるか**、刀江書院、昭和十一年、一圓

尙之に關聯してピアジェの研究を讀むミ好い。

波多野完治、**兒童心理學**、同文館、昭和六年、二圓五十錢
更に進んで種々な兒童に關した知識を得たい人の爲に

は、

千葉胤成、**幼兒の精神**、東宛書房、昭和十一年、二圓五十錢
 加藤正英、**兒童保育の基礎としての心理學**、大阪寶文館、

昭和十年、一圓二十錢

波多野勤子、**子供の發達心理**、刀江書院、昭和十一年、一

圓八十錢

久保良英、**兒童心理學**、藤井書店、昭和六年、四圓五十錢

次の書は最近の兒童研究に餘り觸れては居ないが廣く讀まれて居るものである。

上野陽一、**兒童心理學精義**、中文館、大正十年、五圓三十錢

關寬之、**兒童學原論**、東洋圖書株式會社、昭和二年、四圓

八十錢

關寬之、**最新兒童心理學**、廣文堂、大正十四年、貳圓八拾

錢

尙中文館發行の久保良英編輯、**兒童研究所紀要**は進んだ

研究者の參考になり、次の書は方法的に暗示を與へる。

小野島右左雄、**性格心理學と兒童研究**、中文館、昭和八年、

參圓

波多野完治、**兒童生活と學習心理**、賢文館、昭和十一年、

貳圓八拾錢

その他翻譯物としては、

ビネー原著、波多野完治譯、**教育心理學**、古今書院、昭和

五年、參圓

ブフォード原著、竹井健藏譯、**兒童精神の發達**、古今書院、

昭和五年、貳圓貳拾錢

コフカ原著、縣卷太郎譯、**兒童精神發達の學理**、モナス、

昭和十年

依田新・中野佐三・後藤岩男、**實驗兒童心理學の進歩**、南光

社、昭和十一年、貳圓

ワトソン原著、細井次郎・齋田晃譯、**子供は如何に育てら**

るべきか、成美堂書店、昭和九年

ニール原著、霜田靜志譯、**問題の子供**、その他、刀江書院

その他叢書、全集の形式にして、

子供研究講座、先進社、昭和三年

我が子の育て方全書、平凡社、昭和十年

子供の問題全集、刀江書院、昭和十年

兒童教育講座、叢文閣、昭和十年